

# 「特別活動」における実践的指導力を涵養する教育方法の研究

## —中学校の体育祭をサポートするボランティア体験を中心に—

京都華頂大学現代家政学部現代家政学科 堀 出 雅 人  
佛教大学教育学部教育学科 原 清 治

### 抄 録

学校現場において高度化・複雑化する諸課題に対応できる教員としての実践的指導力を教員養成課程で涵養するため、座学と実学を融合した実践的な学習プログラムづくりが求められている。生徒指導に注目すると集団行動を通じた規範意識の形成と他者と協力的関係を築くコミュニケーション能力の育成を促す教員の指導力向上が重要となる。

本研究では、教職課程の大学3～4年生を研究対象に学校教育において望ましい集団行動を目指す場面として「特別活動」の時間における「個別指導」「集団指導」のあり方を学ぶなかで学生が教員としての実践的指導力を涵養する教育方法を考える。具体的には教職課程の「特別活動の研究」の授業プログラムの一環として、学校行事の大きな一つである体育祭に運営補助ボランティアとして参加することを通して各場面に応じた生徒への働きかけとそのねらいの理解を深める教育実践の結果と改善点について考察を行っている。

### 1. 問題の所在

中央教育審議会（2012）「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」によると、今日の教員養成の現状と課題として、21世紀に求められる人材像から児童生徒の思考力・判断力・表現力等の育成など新たな学びに対応した指導力とともに、学校現場の諸課題の高度化・複雑化に対応する実践的指導力の必要性が説かれている。答申では、当面の改善方策として、教育委員会、地域の学校、大学の三者の連携・協働によって、学部レベルの養成段階から実地教育として学校現場での体験の充実等によるカリキュラムの改

善、いじめ等の生徒指導に係る実践力の向上が挙げられている。

特に複雑化する生徒指導の諸課題を解決するために、原（2014）は現在の中高校生は仲間とのコミュニケーションの手段を対面よりもネットを重視する傾向にあることから、仲間の個人情報「ネタ」として晒しネット上で笑い者になることになってしまった状況を打開するために、対面のコミュニケーションの機会を子どもたちのなかに意図的に形成することによって多様な他者につながる力を伸ばすことが重要であると指摘する。

子どもたちの生活世界にネットコミュニケーションが浸透するなか、学校での生徒間の直接的なコミュニケーションを促進するきっかけづ

くりとして、集団活動を通して、多様な価値観をもった他者と共生、協働する体験を与える「特別活動」の時間のもつ教育的な効果の重要性が増していると考えられる。

中学校学習指導要領（2008）の「特別活動」の目標には、「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」ことが挙げられている。特に、学校行事を通して「集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養い、協力してよりよい学校生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる」ことが目指されている。

「特別活動」の目標から集団活動を通して、生徒一人ひとりの個性の伸長とともに、集団の規範意識を高める自主的、実践的な態度の育成が重要となるため、「特別活動」における実践的な指導課題として「個別指導」と「集団指導」の方法論の構築と実践への応用が求められる。檜垣（2009）によると、「個別指導」において時として賛成・反対する教員と生徒との人間的な関わりのなかから方向性を定め指導していく相互主体的関係によって自主的、実践的な態度を生徒に育てることができるとする。加えて、「特別活動」における「個別指導」は、その指導や指導された生徒の変化を見ている周囲の生徒への影響も大きく、間接的な「集団指導」とつながるという。しがたって、生徒の自治的集団活動の力を高めるために「個別指導」の延長線上に「集団指導」が生きるダイナミズムを利用し、時として、この両者の指導方法を適宜使い分けることが重要であると指摘する。

以上の観点から、「特別活動」の時間における教員の実践的指導力の涵養に向けて、学部段階の教職課程の科目「特別活動の研究」の中で、

檜垣（2009）の指摘する「個別指導」「集団指導」の方法と場面に応じた使い分けについて座学から理論的に学び、その視点を学校現場で実践的に深める体験的な学習プログラムの導入が必要であると考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究では、教職課程の必修科目「特別活動の研究」の履修学生の学修成果の充実、特に「特別活動」で教員に求められる実践的指導力についての理解の深化をめざし、履修学生が「学校行事」にボランティアとして参加する体験的な学習を導入する効果を検討する。今回はA大学で行った「特別活動の研究」の授業実践を取り上げる。授業の中で体験的な学習として履修学生は京都府内のB中学校の体育祭に運営補助のボランティアとして参加した。履修学生が提出したボランティア体験をふりかえるリポートの記述内容から「特別活動」で教員に求められる実践的指導力への理解の深まり、特に「個別指導」と「集団指導」の方法への履修学生の気づきを分析し、その結果を踏まえ、今後のボランティア体験を導入した授業プログラムの在り方について考察を加える。

## 3. 研究方法

今回の研究対象は中学校教諭を志望しA大学の教員養成課程で「特別活動の研究」を履修する3~4年生24名である。「特別活動の研究」の授業の一環として、A大学の近隣にある京都府内の公立B中学校の体育祭当日に運営補助のボランティアとして履修学生24名を参加させた。

履修学生のうち4名はB中学校の教育インターンシップ生として、すでに中学校と関わりをもっている者も一部はいるが、残りのメンバーは中学校への関わりはもっていない。

ボランティア体験を行った後日、体育祭に参加し得た気づきをレポートとしてまとめる課題を履修学生に課した。レポートは「特別活動」での実践的な指導課題である教員の「個別指導」「集団指導」の使い分けの方法と実際に指導をおこなった現場教員の意図、また指導を受けた生徒の反応や変化を中心にまとめることを指定した。なお、「特別活動」の時間における「個別指導」「集団指導」の方法論については、先述の檜垣（2009）の理論を事前の授業で説明しており、履修学生は理論面での基本的な知識を得ているものとする。

提出されたレポートに記述された内容を、それぞれ「個別指導」「集団指導」として挙げられた具体的な場面に別けて、教員の指導方法とその意図、指導を受けた生徒の反応と変化、履修学生の考察の観点から分析を行う。その上で、教員養成課程の「特別活動の研究」において実践的指導力を向上させるための一つの教育方法として学生が志望する校種の「学校行事」の体験的な学習プログラムの効果的な導入について考察を加える。

今回の体験的な学習プログラムとして、3つの段階を踏んでいる。事前学習として、理論的な枠組みとして「特別活動」の時間における「個別指導」「集団指導」の方法論を学んだ。次にボランティア体験の準備としてB中学校で体育祭の前日練習を見学し、B中学校側の担当教員から注意事項および当日のスケジュール、役割分担の説明を受け、全体練習の様子を見ました。体育祭当日は、朝の集合時に校長、副校長からの訓示、担当教員からの注意事項の確認が行われ、その後、履修学生は割り振られた担当の持ち場に着き、持ち場の指導教員の指示を仰ぎながら、体育祭の運営準備に携わった。具体的な仕事として、①招集係、②決勝審判係、③救護、④用具設置係、⑤特別支援学級係、⑥得点掲示係、⑦校門・駐輪場での来校者対応係、また教

育インターンシップに参加している学生は⑧担当する学級の応援席での指導に分けられた。⑧を除き、学生は①～⑦の役割をあらかじめ学校側が決めたシフトに応じて果たした。実施日は2014年9月中旬である。

## 4. 調査結果の分析

B中学校の体育会でボランティア体験をおこなった学生24名のレポートの記述内容が多かった代表的な場面を抽出して、場面ごとの教員の指導方法、教員の意図、指導を受けた生徒の変化、学生の気づきといった面に着目して分析をおこなう（以下、斜体字は学生のレポートの抜粋したものであり、下線は筆者が引いたものである）。

### 4.1. 校門で遅刻した生徒への指導場面

主に保護者や地域住民、また遅刻した生徒を校門で向かえ、自転車、バイクでの来校者には駐輪場を案内し、同時に駐輪場の整理を担当した。この案内役の体験したうちの3名の学生がレポートに内容を記述していた。

・3年生の女性Aさんのレポートより抜粋

遅れて学校に登校する生徒は急ぐそぶりをみせず、どこか面倒そうにしているのを感じ取られた。そこに教員が通りかかった際、「よく来たね」などといった言葉を投げかけていた。

保健室登校の生徒にとっては、学校に行く、教室に入るといったことが大きな壁である。遅刻をしても、その場に来る、ということがその生徒にとっての大きな壁であり、それを乗り越えることを支える個別指導につながるのではないと考える。またそのような生徒を抱えるクラスがその生徒を受け入れる能力を養うのが教員の集団指導にもつながるのではないかと考える。

・3年生の女性Bさんのレポートより抜粋

校舎前で教員が待ち構えており、遅刻してきた生徒一人一人に対して教員がつい沿って校内に入ってく姿が目立った。「君が来るのを待っていた」と言わんばかりの表情で生徒一人一人を迎え入れた。

・3年生の女性Cさんのレポートより抜粋

校門近くの駐輪場の整理。遅刻している生徒に対しては、坂を下りてくるとすぐにどこからともなく先生が表れて、「調子はどうや？」などと遅刻することを責めるのではなく、体調や今日の朝にあったことなど他愛もない話をしながら生徒の今日の様子を確認していた。

3名のレポートに共通している場面は、遅刻して登校した生徒をいち早く察知した教員が声かけに行き、Bさんのレポート記述からもわかるように生徒の横に並んで校舎まで一緒に歩いて行く様子を記述している。遅刻した生徒に対する個別指導の意図として、主要な学校行事の一つである体育祭を、Aさんが指摘するように教室や集団に入るための「大きな壁」を越えるきっかけとしてもらいたいといった教員の期待が伺える。ただ、あくまで押し付けるのではなく、Cさんのレポートにある他愛もない話をしながら遅刻した生徒の体調や精神的な状況を確認しつつ、生徒に無理をさせないといった教育的な配慮も感じられる。遅刻はなんらかの生徒の信号であると教員は認識し、「自分は迎えられている」と遅刻した生徒が感じる声かけ・表情を教員は心掛けていることから、教師の期待と生徒の思いを相互主体的に取り入れて個別指導に臨む現場教員の実践的指導力を学生たちは見出していると考えられる。

## 4. 2. 競技中に反則行為を行った生徒への指導場面

主に競技の決勝審判や用具設置の係に携わった学生のリポートに挙げられた代表的な場面は競技中に反則行為を行った生徒への指導である。

・3年生の男性Dさんのレポートより抜粋

反則した生徒にはダメなものはダメということに分からせる。それによって他の生徒も直接指導を受けていなくても反則というのを認識する。同時に、一人が崩れると全員が崩れるという連帯責任が生まれていることも分かる。

・3年生の男性Eさんのレポートより抜粋

個人が起こした反則行為はチームへの迷惑、いわば連帯責任であることが指導された場面があった。その際には、個人への指導ではなく集団への指導として行われていた

・3年生の女性Fさんのレポートより抜粋

学年競技での反則行為があり、担当で協議が行われ、相手チームにポイントが加算された。社会や集団で存在する規則の重要性を生徒たちに教える良い機会でもあるのではないかなと思えるようになった。

・3年生の男性Gさんのレポートより抜粋

綱引きは集団指導が難しかった。綱を指示される前に持ったり、軽く自分の陣地に引き寄せたりなどの行動がみられた。この時に教員は行った生徒に強い口調で指導を入れた。すると陰で行っていた生徒も綱を引っ張ることをやめ、綱から手を放した生徒も見られた。1対多の関係性とだと思う。

学習指導要領「特別活動」の「学校行事」の「健康安全・体育的行事」の目標として、運動を通



して「安全な行動や規律ある集団行動の体得」「責任感や連帯感の涵養」が挙げられる。D～Gさんの記述にあるように、違反を行った数名に対して直接的に個別指導を行うのではなく、競技を中断して、審判団が協議し見解を一致させた段階で、マイクを通して、具体的にどのようなルール違反があったのか、なぜそれが違反なのか、を全体に指導を行っていた。最後に違反内容に沿ったペナルティをチーム全体に課す説明が行われた。ほかのチームに勝ちたいという生徒の気持ちに理解を示しつつ、ルール違反について毅然として態度で集団指導を行うことで、集団行動で求められる規律と連帯責任の原則を全校生に理解させ、違反した生徒にその事態の大きさを認識させる効果があると考えられる。以上のレポートから反則行為の指導場面を通して集団指導から間接的に個別指導へとつなげていることを学生たちは読み取っていた。

#### 4. 3. 特別支援学級の生徒への指導場面

次は特別支援学級の補助を担っていた学生のレポートからの抜粋である。

##### ・3年生の女性Hさんのレポートより抜粋

特別支援学級の生徒の中に、一人だけ鉢巻が自分で結べない生徒がおり、特別支援学級の先生は、朝から自分で結んでくる約束をしたことが守れていないことに個別指導した。しかし、他の生徒がいる中で行った指導なので、集団指導にも繋がっていたと考えられる。「自分のことは自分でやらなければならない」ということを、注意された生徒だけではなく、周りの生徒にも認識されることで、一对多の集団指導を行っていた。特別支援学級では、個別指導がメインで行われると私は考えていたが、実際には集団指導にも力を入れていることがボランティアを通して理解できた。

特別支援学級においても、望ましい集団行動への態度と実践力を身に付けるための指導が行われていることに、特別支援学級にはじめて携わったHさんは気づき、そこでも個別指導から集団指導へと教員の力量によって指導範囲が広げられることを理解している。

#### 4. 4. 応援席周辺の逸脱行為への指導場面

応援席周辺での逸脱行為への指導場面を挙げている者は主に教育インターンシップとして9月からB中学校に関わっている学生たちで、インターンシッププログラムとの兼ね合いからそれぞれ特定の学級に入り込んで生徒指導にあたっていた。

##### ・3年生の男性Iさんのレポートより抜粋

危険な悪ふざけに対して、みんなが応援している所から離れたテニスコートの横に行き、話し合っていた。他の体育祭に参加している者の気持ちが阻害されることも考えた指導。注意とともに会話することで、先生側の意志をより理解できると考えられる。なぜ注意されているのか、なぜ悪いことなのかを改めて生徒が考えられる。

##### ・3年生の男性Jさんのレポートより抜粋

個別指導の場面では、教員は生徒へ直接的な指導をしており、体育大会の空気を悪くしてはいけないという思いか、生徒のいないところで指導が多かったように思えた。

##### ・3年生の男性Kさんのレポートより抜粋

自分のクラスの生徒が競技に出ていて頑張っている時に応援をせずに友達と話している生徒にクラス全体に聞こえるように大きな声で注意していた。その声に一瞬他の生徒たちも静かになったが、注意された内容が分かったと全員が一段と大きな声で応援を始めた。生徒同士での声

掛けも行っており、その声が届かないときや聞かないときなどに先生が注意しているようだった。

応援席では席に座って自分のチームを応援する決まりとなっていたが、その中で、逸脱行為をおこなう生徒に対する教員の個別指導の様子を学生は観察している。Jさんが「体育大会の空気」と表現するように、多くの生徒がルールに則り一体感をもち応援をしている雰囲気壊さないように、逸脱するごく少数の生徒のために集団指導を行うことを避け個別指導を行う教員の実践的判断力を学生は読み取っている。個別指導も一方的に指導するのではなく、生徒との対話から、生徒にいま集団の中でどのような行為を行えばよいのかを考えさせる指導方法をとっている。このことから、個別指導を選択した教員の意図として、全体の雰囲気を保つと同時に、静かな場所で逸脱行動をおこなった生徒がじっくりと自分の行為をふりかえり冷静さを取り戻すきっかけを与えたかったということも考えられる。

逆に、Kさんのレポートから応援席で応援をせず私語をおこなう生徒に対して教員がチーム全体に聴こえるように大きな声で注意している集団指導をしている様子を観察している。その後、チームの応援がさらに大きくなったという記述から、1対多の効果的な指導であったとのKさんの認識が読み取れる

#### 4. 5. 体育祭終了後の帰りの学活の指導 場面

主に教育インターンシップとして特定の学級に入り込んでいる学生のレポートから担任の指導を観察した部分を抜粋した。

・3年生の女性Lさんのレポートより抜粋

学活では、一人ひとりの細かい行動を褒めた

あとに、「このクラスみんなが頑張っていた。勝ったチームも負けたチームもいるけれど、勝ち負けじゃないよね」と声掛けを行った。教員が自分を細かく見ているという安心感、クラスの生徒が応援してくれている期待が個人の自信にもつながり、それが集団で発揮されるのではないかと感じた。

・3年生の女性Mさんのレポートより抜粋

学級につく際、「頭ごなしに怒ってはいけない」と最初に注意事項を伝えられた。先生方は生徒に対して感情的に叱るのではなく、一つ一つどうしてそのような結果につながってしまったのかを生徒と振り返っていた。何が問題であったかを生徒に気付かせる姿勢が見て取れた。先生方は生徒一人ひとりの個性を理解されそれを基に指導されていることで生徒との信頼関係が構築されている。

Lさんのレポートは体育祭終了後の帰りの学活の様子を記述しており、学級担任は、集団の場で一人ひとりの貢献を褒めることで、生徒は自己肯定感を高め、同時にほかのクラスメイトのがんばりや善さを理解することで仲間意識が高まり、クラスがより望ましい集団となるように一体感を生み出すように個人指導と集団指導のダイナミズムを活かしている様子がわかる。また、Mさんのレポートにあるように、今回の反省を次回に活かすために、課題点を1つずつ原因と結果を照らし合わせて生徒と一緒に考えている様子がわかる。2つのレポートから、学級経営を進めるために、教員の生徒理解と、教員と生徒との信頼関係の構築が大切な要素であるといった気づきを得たと考えられる。

#### 4. 6. 任された役割の範囲内で行った学 生から生徒への指導場面

今回のボランティア体験は基本的には体育祭

の運営補助であり、そこから教員が行う生徒への指導を観察することが主なねらいであったが、与えられた役割によって直接生徒に学生が指導しなければいけない場面もあった。教員が個人指導と集団指導を使い分けている様子を理解しつつ、実際に自らが指導にあたる場合、2つの指導方法をどのように使い分ければよいのか葛藤する学生の様子がリポートから読み取れる。

・3年生の女性Nさんのリポートより抜粋

担当教員は「シャツインして、しっかり鉢巻を結び、装飾品を外さないと失格になってしまつて得点が入らない」と全体に指示すると同時に「〇〇やったらいける！今までの練習がある！がんばれ！」という個別の声かけが多々見られた。声かけまでは実践できなかったが、服装や応援指導を通して、応援時に2、3人が立ちだすとそれにつられて半分くらいの生徒が立ちだすといったことがあったのだが、その場合、もう一度全体的に指導するのか、立っている生徒だけ部分的（個別的）に指導するのかどちらのほうが効果的なのか、戸惑ったところであった。

・4年生の女性Oさんのリポートより抜粋

徒競走などの種目の際にゴールしてきた生徒たちをそれぞれのクラスごとに座ってならばせるといふ仕事内容であった。学生たちの私たちが「座っててください」と声をかけてもなかなか座ろうとしない生徒の近くにいた先生が同じように指導すると素直に聞く、という場面がありこれが日頃積み重ねている関係がもたらす信頼感なのであろうと推測できた。

・3年生の女性Pさんのリポートより抜粋

競技者が多い種目では、教員が全体を見て、並んで座るように指導し、座らない生徒には、

他の教員が個別に座るように指導を行っていた。集団全体への指導と、その集団内の個人への指導とを、上手く同時に行い、1つの集団をまとめていた。教員の立場を体験して、生徒にも考えさせるために指示を出しすぎないように注意したり、集団をまとめるためにはどのような指示の出し方が良いのかを考えたりと、指示を出す難しさを実感した。

・3年生の女性Qさんのリポートより抜粋

閉会式のときにうつむいた生徒がいて「お前、ちゃんとしろよ！」と強く攻める生徒がいた。今にもケンカになってしまいそうでしたが、周囲の生徒が「頑張ったんやから悔しいのは当たり前やんか」という声に強気でいた生徒は黙ってしまった。その強気だった生徒は最後まで諦めずに勝利を目指していた。誰よりも悔しさを味わっていたからこそ音込んだ友達の姿を見るのが辛かったんだらうと思った。

N~Qさんまでそれぞれの視点から指導方法の使い分けと指示の出し方について悩みながらも考えを深めている。Nさんは、個別指導か集団指導か即座に判断することができず、結局なにも指導できなかった状況に葛藤している様子がわかる。Oさんは、自分の指導は聴き入れられず、担当教員の指導は素直に聴き入れた生徒の対応の違いの要因を日常的な関わりによって積み重ねられる信頼感が構築されているか、いないかの差ではないかと推測している。Pさんは、集団指導にあたる際の教員同士の連携に着目しながら、生徒が自ら考え行動に移せるような指示をその場面に応じて一瞬で判断することの困難さに気づいている。Qさんは、生徒理解と生徒間の自己指導力について考察を深めている。具体的には、ケンカになりそうな雰囲気ですこれまでの自分であれば止めに入っていたが、B中学校が大切にする生徒が主体的に学び考え

る方針に従って状況を見守る中で、周囲の生徒からの仲裁の声かけがあり、その場を生徒間で治めることができた。さらに、Qさんは、なぜ「お前、ちゃんとしろよ!」と彼が発したのか、生徒の気持ちにたって生徒理解を深める姿勢がでてきている。

#### 4-7 分析結果のまとめ

以上、6つの指導場面から教員が特別活動で行う個別指導と集団指導の使い分けについて学生が観察し考えたことを中心に分析を行ってきた。多くの場面で結果的に、教員の指導が個別指導から集団指導へとつながっており、教員と生徒の1対1の指導が、教員と学級全体といった1対多の指導へと広がっていることが学生のレポートから読み取れる。特に体育祭がもつ目標から運動を通した規範性と連帯性の確立を促進するために集団指導が効果的に使われているように考えられる。一方で、遅刻した生徒や逸脱行為を行う生徒に対しては個別指導が取られている場合が多く、生徒の状況に応じて適宜指導方法が使い分けられていることがわかった。

さらに、学生のレポートから、B中学校は生徒が主体的に学び、考え、行動することに重点が置かれており、その目標を達成に応じた教員からの問いかけや生徒との接し方が取られているように考えられる。したがって、この体育大会は、生徒の主体性や自律性がどこまで育っているかを日常の学習成果を教員が評価する機会ともなっており、生徒が教師のその意図を感じ、主体的に考え行動しようとする姿勢が見受けられる。

今回のボランティア体験の結果を踏まえ、次節では、「特別活動」の実践的指導力の理解を促進するために、「特別活動の研究」に導入する体験的な学習の方法について考察を加える。

## 5. 考察

今回、教職課程の科目「特別活動の研究」の中で教員の実践的指導力への理解を深める試みとして実際に中学校の「特別活動」にボランティアとして参加して、実践的な指導課題に対して教員がどのように指導にあたったかを観察する授業プログラムを実践した。ボランティア後の学生のレポートを分析したところ、観察する際の視点として課題とした個別指導、集団指導の使い分けについて主な6つの指導場面から詳細に記述されていた。学生はレポートの中で指導を使い分けた現場教員の意図を周囲の状況から分析し、また、自らの声かけや指導が生徒に聴き入れられず、なぜ上手く行かなかったのかを考察する記述も見られた。以上から、今回の教育実践は「特別活動」における実践的指導力の理解を深めることに一定の効果が得られたと考えられる。

しかしながら、今後の課題として次の3つの観点から今回の授業プログラムの改善する必要があると思われる。1つ目は体育祭当日までの学習準備、2つ目は体育祭当日の学生ボランティアの関わり、3つ目は、体育祭が終わった後の事後指導である。

1つ目の体育祭当日までの学習準備について、今回、「特別活動」の実践的指導力の1つとして取り上げた「個別指導」「集団指導」の使い分けについて、事前の大学での授業でテキスト学習を中心に授業担当者と履修学生との間でディスカッションを行い、指導方法についての理解を深めた。また、体育祭前日に中学校を訪問し、全体練習の見学および中学校側の担当教員からの生徒の様子、当日のスケジュール、服装など各種注意事項の説明が行われた。体育祭当日の様子からスムーズに学生が運営補助に関われたことから、事前準備の不足はなかったと考えられる。しかし、学校現場に慣れていな



い学生も多数いたこともあり緊張や戸惑っている様子を垣間見ることができた。しがたって、大学での授業の段階で、中学校の学校文化について説明、さらに理論として学んだ「個別指導」「集団指導」の使い分けについてケーススタディを行うことを通して、ある程度、イメージを膨らませて上で学生が本番のボランティアに臨めるような仕掛けづくりを行う必要がある。

2つ目の体育祭当日の学生ボランティアの関わりについて、学生は中学校側に決められたシフトに応じて運営補助を行ったが、場所によっては担当教員も準備に追われ、また突発的な生徒指導により、学生に適宜指導ができない状況が見られた。学生自身も任された範囲内でどこまで生徒への指導にあたってよいものか判断が難しく、躊躇した様子も散見された。また、学生のレポートにあったように、学生と生徒との間に信頼関係が築けていない状況で学生が指導にあたることで、生徒の戸惑いや学生への不信任感を助長する恐れを生む可能性もあることがわかった。シフトの担当制を引く場合、当日までに持ち場の担当教員と学生との間での簡単な打合せ、時間がなければ、文章や図による仕事内容の説明書を作成することで、担当教員と学生との間に役割分担が明確になり、さらにスムーズに運営補助に学生が携われると考える。また、学生との生徒との間に信頼関係を構築することは時間的な問題も考えられるために、担当教員からの直後のフォローや大学の授業担当者からの事後のフォローによって、精神的に傷ついた学生の支援を行う必要があると考えられる。同様に、学生に不信任をもった生徒へのフォローも重要であると考えられる。しかし、一方で現場教員の負担をなるべく増やさずに学生指導を行う手立てを検討する必要がある。

3つ目の体育祭が終わった後の履修学生への事後指導について、今回は、集中講義として授業プログラムを組んでいたために、レポート提

出も後日期限を設けて提出することで授業を終えた。レポートの記述内容から、学生一人ひとりをみれば若干の差はあるものの、授業の到達目標の一つである特別活動における実践的指導力の理解を深めていることがわかる。しかし、理解した実践的指導力を今後は自ら実践できるための知識・技能の定着が求められ、例えば、授業プログラムの14~15回目あたりに、レポートで取り上げられた指導場面をもとに事例研究を行い、履修した学生同士、個々が得た経験を共有化することで、学校現場での実践につながれると考えられる。

以上、授業改善に向けて3つの点を取り上げたが、通底する項目として、今回の授業実践を通して、教職課程における体験的なプログラムを実現させる場合、中教審答申（2012）が指摘するように教育委員会、地域の学校、大学の3者の緊密な連携を鍵となり、どのように構築していくかが制度上の課題となることがわかった。

全国私立大学教職課程研究連絡協議会の専門部会である「学校インターンシップ等検討委員会」がまとめた報告書の中で、森田（2013）は、早い段階から現場の活動に携わり、自らの力量形成を行ったり、教員としての適正を見極めたりするには、現場の体験活動は有効であるとしつつ、学校現場の求める活動内容と派遣学生の力量を勘案しながら、現場と学生のニーズのミスマッチを防ぐために「現場理解」に任せるのではなく、現場の理解を促すために、大学からの働きかけが不可欠であると述べる。

今回の授業実践から、実践的指導力の涵養をめざした体験的な学習を行うためには学校現場の協力が欠かせない。特に学校現場で日々蓄積される教員の実践知から教員を目指す学生が学ぶことは大きい。大学の授業プログラムを改善していく視点に立つと、教育委員会を通した受け入れ学校との早い段階からの事前打合せと学

校現場で学生指導の負担をかける担当教員への授業プログラムの説明と理解および当日の具体的な学生の役割分担などを押えておく必要がある。

## 6. まとめ

本研究では「特別活動」における実践的指導力の理解を深めるために、学部レベルの授業の中で実際に学校行事に参加し体験的な学習を行うことをねらいとした教育実践を通して、学生が記述したりレポートをもとに、授業プログラムの改善に向けた提案を行った。体育祭にボランティアとした参加した学生のレポートから現場教員の実践知や判断過程の分析からこれまで大学の講義形式の授業で学んだ理論を応用する視点を学生自身の見出すことにつながっていた。このような体験的な学習を大学の授業プログラムにどのように組み込んでいくかが重要となってくる。

今回の研究で明らかになった改善点を踏まえ、次年度の教育実践に向けて授業プログラムの改善を進める。また、履修学生の実践的指導力の涵養をめざし教育委員会を通した受け入れ学校と大学との連携方法の在り方と現場教員の理解を広げるアプローチの体制作りについては今後の研究課題とする。

## 参考文献・URL

- 中央教育審議会 (2012)「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について(答申)」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325092.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325092.htm)  
(2014年11月15日、データ取得)
- 原清治 (2014)「複雑化する生徒指導諸課題の特質—ネットいじめの実態を手がかりとして—」、学事出版『月刊高校教育』2014年8月号、pp.22-24
- 檜垣公明 (2009)「第5章 特別活動の指導原理」原清治・檜垣公明編著『深く考え、実践する特別活動の創造—自己理解と他者理解の深まりを通して』学文社、pp91-100
- 森田真樹 (2013)「今後の現場体験活動の方向性について考える」全国私立大学教職課程研究連絡協議会報告書『現場体験型教員養成の実態と課題 第2報』全国私立大学教職課程研究連絡協議会、pp.43-51
- 文部科学省 (2008)「中学校学習指導要領 第5章 特別活動」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/toku.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/toku.htm) (2014年11月15日、データ取得)